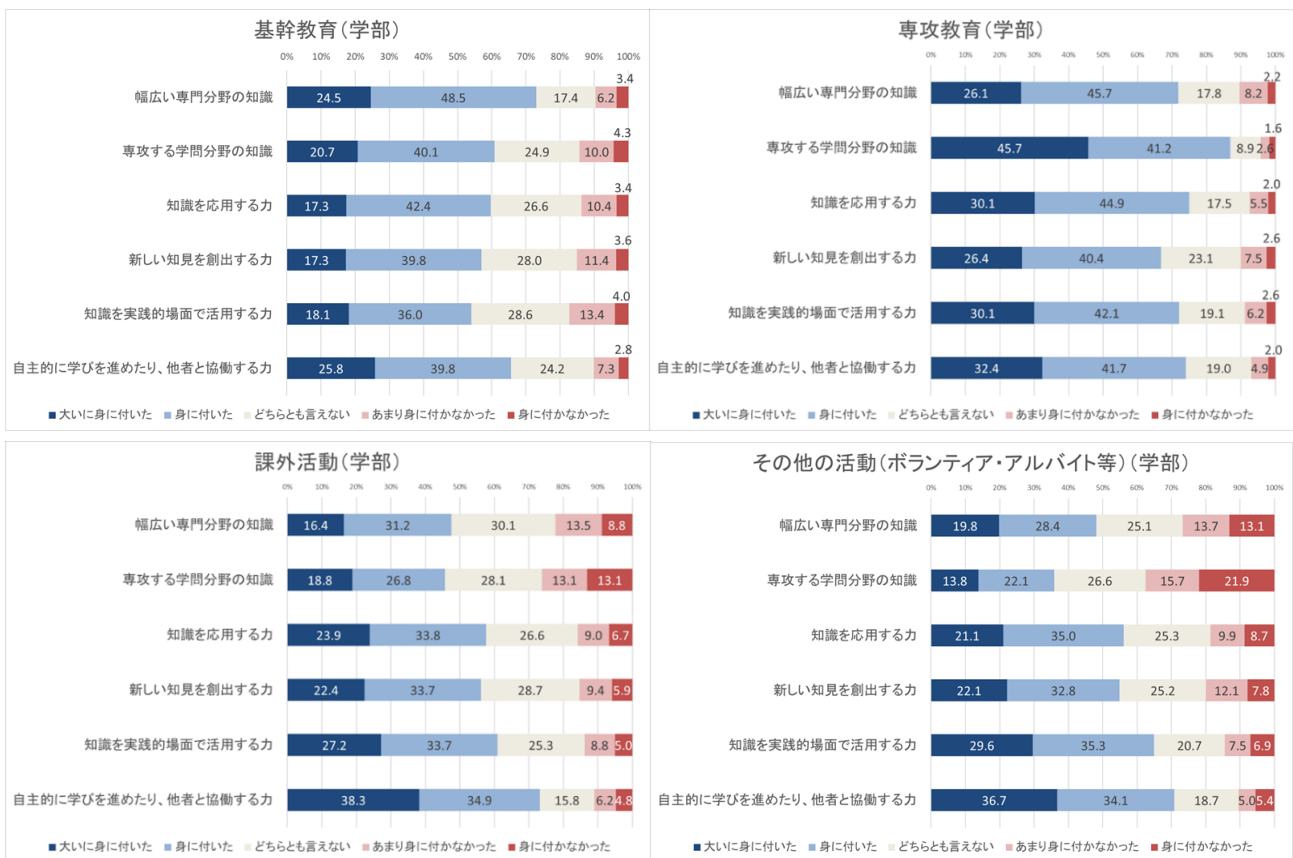


このニュースレターは令和 4 年度卒業生・修了生を対象とした「九州大学卒業生調査」の結果を分かりやすくまとめたものです。調査結果の詳細については、「令和 4 年度卒業・修了生調査分析結果報告書」(<https://mirai.kyushu-u.ac.jp/curriculum/stakeholder/>) をご確認ください。

1. 教育達成についての自己評価

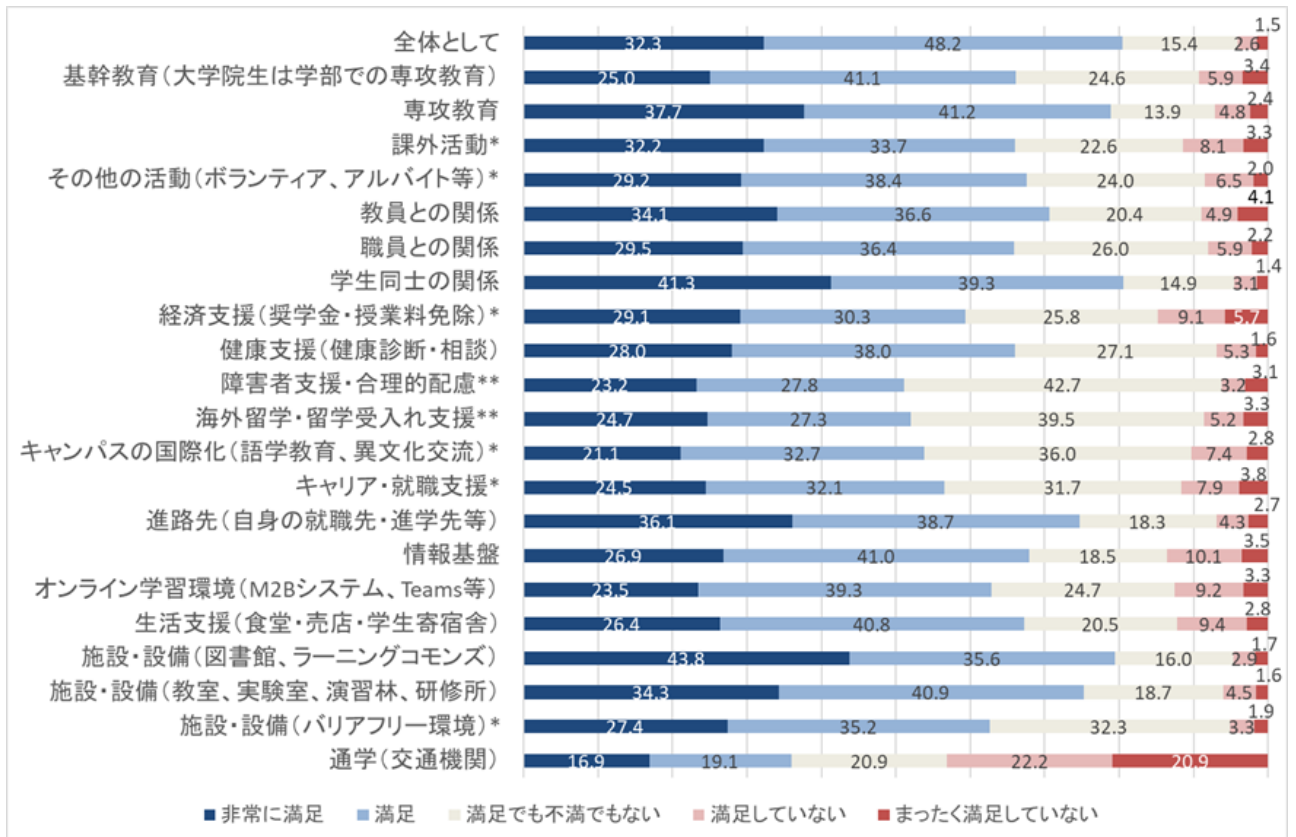


まず、「基幹教育」「専攻教育」「課外活動」「その他活動(ボランティア・アルバイト等)」の4つの項目ごとに、教育達成についての自己評価をたずねた結果を紹介します。なお、紙幅の都合上、グラフは学部卒業生の結果のみを載せています。

基幹教育は〈幅広い学問分野の知識〉の評価が高く、専攻教育は〈専攻する学問分野の知識〉を中心に全体的に評価が高くなりました。また、課外活動やその他の活動(ボランティア・アルバイト等)では特に〈自主的に学びを進めたり、他者と協働する力〉が身に付いたと評価されていました。

学部卒業生と比較して、大学院修了生の方が、いずれの項目においても全体的に「大いに身についた」、「身についた」の割合が高くなっています。

2. 満足度



続いて、21項目+「全体として」の全22項目にわたっての満足度を5段階でたずねた結果を紹介します。

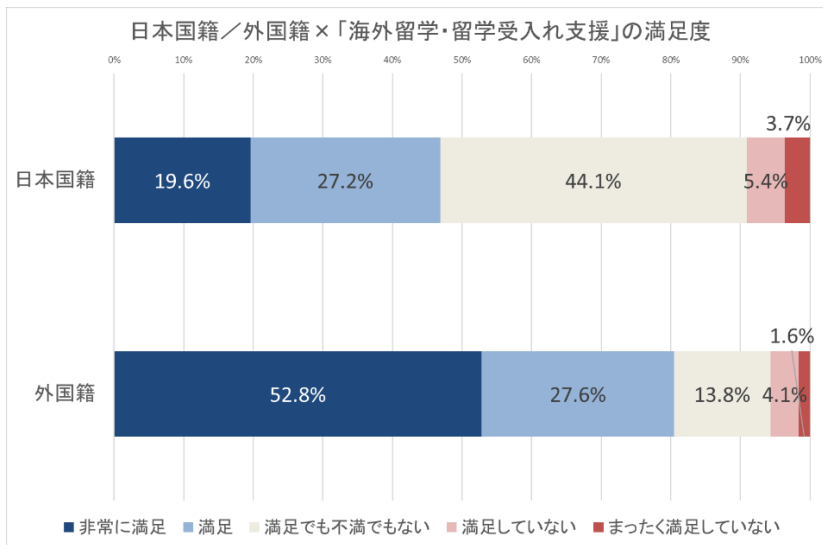
まず、「全体として」は、「非常に満足」と「満足」をあわせて80.5%になっており、全体的に非常に高い満足度になっていました。

各項目の中で特に満足度が高くなっていったのは、「専攻教育」「学生同士の関係」「施設・設備(図書館、ラーニングcommons)」でした。

一方で、「通学(交通機関)」については、他の項目と比べて「満足していない」「全く満足していない」の回答の割合が高く、その割合は昨年度調査よりも増加していました。

なお、「N/A=わからない・非該当」という回答の割合が20%以上の項目に「**」を、10%以上20%未満の項目に「*」を付けています。「**」の項目は、「障害者支援・合理的配慮」と「海外留学・受入れ支援」の2項目です。今回のニュースレターでは、このうち「海外留学・受入れ支援」について、詳細に見ていきたいと思えます。

★海外留学・留学受入れ支援の満足度



	N/A の割合
日本国籍	30.7%
外国籍	14.6%

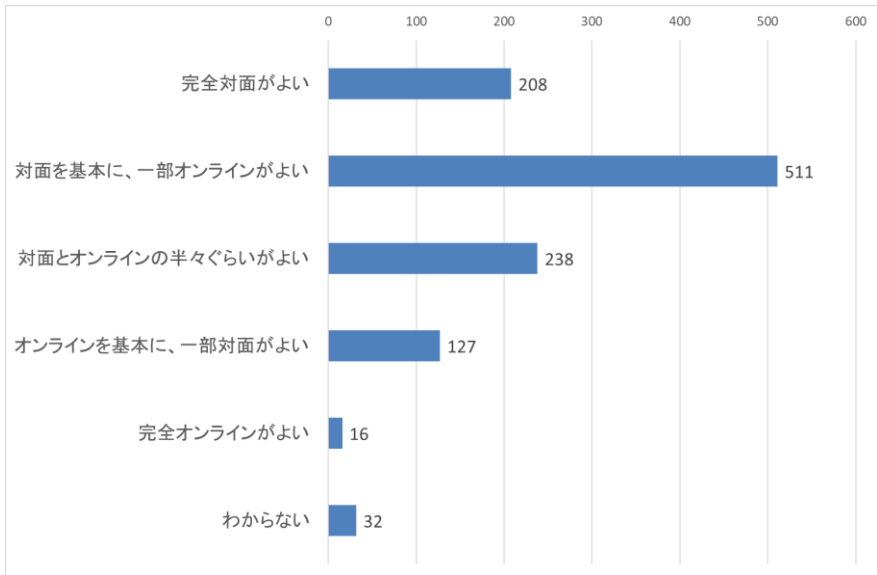
このグラフは、「海外留学・留学受入れ支援」の満足度を、日本国籍／外国籍別に集計したものです。厳密には言い切れませんが、おおよそ日本国籍のグラフが「海外留学支援」の満足度に対応し、外国籍のグラフが「留学受入れ支援」の満足度に対応しているものと思われます。

外国籍のグラフをみると、「非常に満足」だけで半数を超え、「満足」とあわせると8割を超えており、「留学受入れ支援」の満足度は高いと考えられます。一方、日本国籍のグラフをみると、「非常に満足」と「満足」の回答の合計は5割に達しておらず、「海外留学支援」の満足度はそれほど高くはないことが推察されます。

ただし、それぞれの「N/A=わからない・非該当」の割合をみると、日本国籍の方では約3割と高くなっていることに加え、「満足でも不満でもない」という中間的回答も多いため、上記の解釈には留意が必要です。日本国籍の人のなかには「海外留学」を考えない人もおり、そのために満足度を答えづらいという人も一定数いることが考えられます。

「留学受入れ支援」に関して、学生班メンバーの留学生は、次のように感じているといます。まず、国際留学課やサポーター制度は、日々の生活のことや事務的な手続きについての手助けになっており、基幹教育の「日本事情」や「世界が仕事場」のような授業は、留学生と日本人学生の交流の場となっています。一方、履修の仕方や授業の内容でわからないことを聞いたり、進路のことで相談したりすることができる場はあまりないと感じています。学部学府ごとに、勉学に関する支援がもう少しあると、留学生たちはより安心して大学生活を楽しむことができると思います。対して、「海外留学支援」では、学部学府ごとのプログラムがあり、そこはよいところではないかと思います。

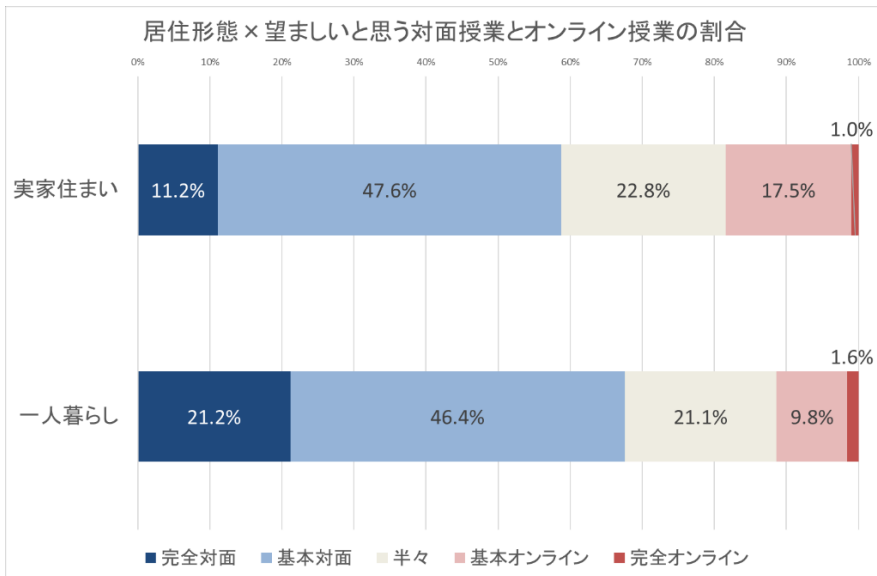
3. 望ましい対面授業とオンライン授業の割合



続いて、令和4年度より新たに加えた「今後あるべき対面授業とオンライン授業の割合」に関する結果を紹介します。

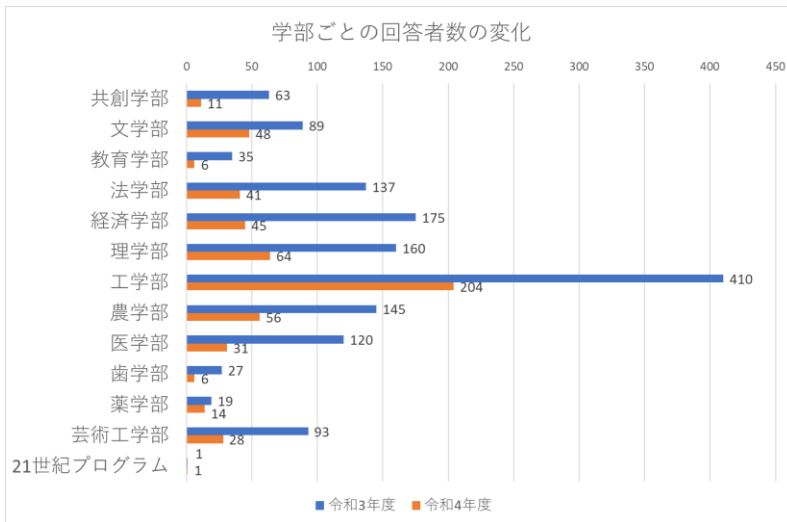
まず、最も多かった回答が「対面を基本に、一部オンラインがよい」(45.1%)。次いで、「対面とオンラインの半々ぐらいがよい」(21.0%)、「完全対面がよい」(18.4%)の順であり、どちらかという対面を支持する声の方が大きくなりました。

そのように答えた理由について尋ねる自由回答の設問では、対面のメリットとして、友人との交流のしやすさ、議論や質問のしやすさ、集中力の保ちやすさなどが挙げられ、オンラインのメリットとして、主に効率性が挙げられました。後者については、伊都キャンパスの交通の便の悪さと関連付けられていた回答も多かったため、居住形態（実家住まい／一人暮らし）別に結果を整理しなおしてみました。

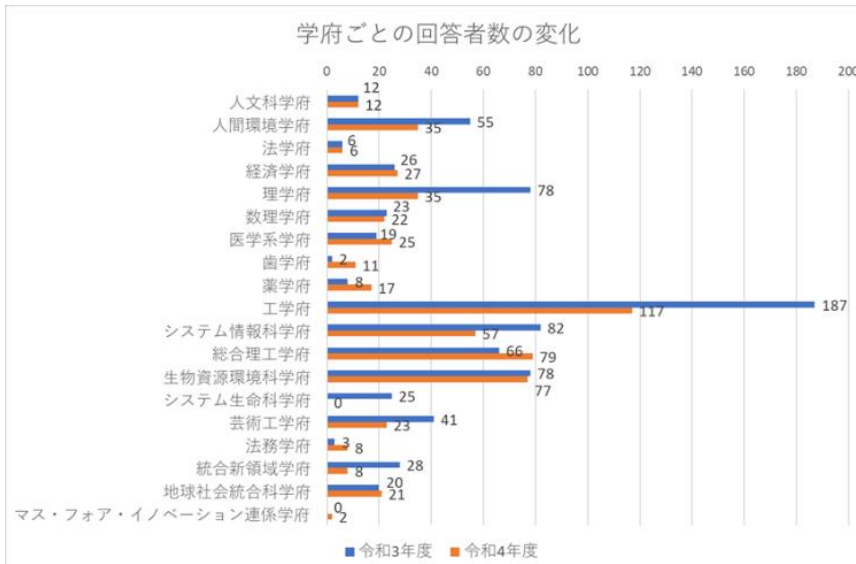


結果をみると、やはり一人暮らしをしている人よりも実家住まいをしている人の方がオンラインを支持する人が多くっており、通学のしづらさがオンライン支持と一部結びついていると考えられます。

★回答者数



	回答率
共創学部	12.5%
文学部	29.8%
教育学部	12.2%
法学部	21.4%
経済学部	18.8%
理学部	24.4%
工学部	24.8%
農学部	25.2%
医学部	11.9%
歯学部	16.2%
薬学部	17.5%
芸術工学部	13.7%
21世紀プログラム	25.0%



	回答率
人文社会科学学府	32.4%
人間環境学府	20.0%
法学府	14.6%
経済学府	20.6%
理学府	20.3%
数理学府	37.3%
医学系学府	13.7%
歯学府	30.6%
薬学府	25.8%
工学府	21.0%
システム情報学府	30.8%
総合理工学府	28.8%
生物資源環境科学府	26.3%
システム生命科学府	0.0%
芸術学府	16.3%
法務学府	7.6%
統合新領域学府	18.6%
地球社会統合科学府	100.0%
マス・フォア・イノベーション連係学府	16.7%

本年度調査の回答数の大幅な減少(2,233票→1,137票)は、調査方法の変更によると推測されます。

魅力的なニュースレターにしていくために、皆様のご意見を是非お聞かせください。

未来人材育成機構メールアドレス innovation@ueii.kyushu-u.ac.jp

未来人材育成機構九州大学ステークホルダー調査(KU-SHS)学生班

安本祥子(人間環境学府・修士課程1年)、岩元彩純(法学部・学部4年)

濱村康平(文学部・3年)、田嘉禾(経済学部経済工学科・2年)

※未来人材育成機構九州大学ステークホルダー調査(KU-SHS)学生班は、学生による大学運営への貢献を促進する目的で、令和4年6月に設置されました。

学生班は、未来人材育成機構長(総長)の委嘱を受けて、九州大学ステークホルダー調査の分析・報告・広報を担当しています。